

平成 29 年 11 月 16 日 (木)

プロジェクト報告書

京都シネマインターンシップ生
阿部愛恵 今井希美 平澤亜美 松田丹奈

私たち京都シネマインターンシップ生は、10月14日から10月20日に開催された第39回ぴあフィルムフェスティバル（PFF）の運営サポートというプロジェクトのもと、6月から11月の5ヶ月間に渡ってインターンシップ活動を行いました。

6月、初めての打ち合わせでメンバーと京都シネマの横地支配人、大学コンソーシアムの京都コーディネーターの大西先生との顔合わせを行い、このプロジェクトでの最終目標について話し合いました。自主制作映画や映画祭に対してそれぞれが抱くイメージを共有し、映画祭の敷居の高さを払拭すべく、TwitterやFacebookなどSNSを利用して私たちと同年代の若い人々をターゲットに宣伝活動を行っていこうと決めました。そして最終的には昨年度よりもPFFの動員人数を増やすことを目標として掲げました。

まず初めの活動は、PFFアワードのかつての入選監督の作品で見たことのない作品を一つ選び、個人で鑑賞するというものです。映画の感想だけでなく、自分がその映画を選んだ理由を挙げることで、何が基準となりどんなきっかけで映画を見ようと思うのかなど、これからの広報活動における手がかりを掴みました。さらに、実際に世間ではどのようなところで映画の広告を見ることができるのか、どんなメディアで宣伝が行われているのかを知る為に映画の広告やチラシを収集しました。実際に目で見て足を使って、手探りの状態でしたが10月のPFF本祭に向けて、徐々にプロジェクトが動き出しました。

そして6月28日から行われた実習では京都のLumenGalleryにて『帰巢譚』という映像個展の運営補助と作品鑑賞を行いました。初めて実験映画や自主制作映画に触れ、上映会の雰囲気の中、お客様を迎えるという体験はPFFに向けての第一歩になりました。

夏休み前、次の実習では再び京都のLumenGalleryで『VIDEOPARTY』という映像公募展の受付業務と作品の鑑賞を行いました。『VIDEOPARTY』とは三日間で約60作品が上映されるイベントです。アニメーションや学生による卒業制作など、多様なジャンルの映像が集まっており、楽しんで鑑賞することができました。ここでの実習はPFF入選作品の鑑賞に向けて、たくさんの作品に触れること、京都開催のプログラムを考えるうえでも参考になる貴重な経験でした。

また、この時期にインターンシップ生の一人がご実家の関係で活動に参加することが困難な状況となったため、インターンシップ生5名での活動が主体となりました。

6月から7月にかけて行われたLumenGalleryでの実習経験を踏まえて、8月6日、8日、17日の三日間にわけて、2017年度のPFFアワード入選作品17作品の鑑賞会を行いました。京都開催でのプログラムを決定するために、全ての作品を一気に見ることは集中力のいる作業でしたが、これまでの実習経験のおかげで最後まで気を抜かず鑑賞することができました。

PFF 京都開催におけるプログラム確定の 8 月 20 日に向けて、個人で構成を考え、それを持ち寄る形でプログラムについての話し合いを行いました。しかし決定日まで全員で直接集まる時間が取れず、電話での会議になってしまったことから、意見がまとまらず決定までに時間を要してしまいました。このプログラム決定の作業において、京都シネマの横地支配人にも指摘されましたが、作業の過程における報告不足、連携の甘さが私たちの課題であると感じました。しかし最終的にはテーマ性、内容、曜日を考慮し、どの日程に会場しても楽しんでもらえるようなコンセプトでプログラムを決定することができました。

そして、これから本格的に PFF 本祭に向けての活動が始まるにあたって、インターン生が広報活動の一環として手売りするチケットの作成に取り掛かりました。チケットデザインに関して、作品のワンシーンを描く、並べると一つの絵になる、PFF を象徴するデザイン、など様々な意見が出ましたが、夏休み期間ということもあり話し合いが主にメールでのやり取りのまま意見がすれ違うことが多々ありました。個人でこなす作業と全体で進めるべき目的が不明瞭なまま時間だけが過ぎてしまったように思います。結果、チケット完成までかなりの時間を費やしてしまい、本来 9 月からの予定であった広報活動が 10 月までずれ込んでしまいました。

9 月 15 日から 18 日と 22 日から 24 日にかけて LumenGallery にて『ニッポンの嘘報道 写真家福島菊次郎 90 歳』というドキュメンタリー映画の上映と写真展での実習を行い、そこで実際にお客様の前で PFF の宣伝をさせて頂きました。チケットを買って見に来てもらうにはどんなことを話せばいいのか、短い時間の中で私たちの活動についてどう伝えるのかを考え、人前で話すという貴重な経験になりました。この実習期間中に、完成した PFF のチラシとポスターを一人 800 枚ずつ受け取り、完成したチケットの方は一人 10 枚ずつ持って広報活動を開始しました。

最初に決定した通り、自分たちと同年代の学生を主なターゲットに、ポスターやチラシを置いて頂けそうな図書館、書店、美術館、カフェなど京都の施設を重点的にあたり、多くの施設にチラシを置いていただくことができました。また、大学や身の回りの飲食店など足を運べる場所には積極的に伺い、PFF の宣伝をさせて頂くように努めました。一方、苦労したのはチケット販売です。宣伝や広報活動とは異なり実際に料金を頂くとすると、思うように販売できず、チケットを買って映画祭に来てもらうということの難しさを痛感しました。

またこの時期に、仕事の分担が上手くいっていない、メンバー間に遠慮がありプロジェクトが滞っているなどの理由からインターン生の一人が活動を辞退するという結果になってしまいました。兼ねてから私たちが抱えてきた報告・連絡・相談に関する意識の甘さを改めるため、一度話し合いの場を設け、反省点などを共有し、精一杯プロジェクトに取り組む意志を再確認しました。

10 月上旬、PFF 本祭まであと僅かですが、SNS を利用して作品の紹介を行ったり、京都の大学の映画サークルや映像学部と連絡を取ったりと最後まで諦めずに広報活動を行いました。

そして迎えた本祭、私たちの業務はお客様に公式カタログを配布すること、上映前にマイクを持って挨拶をすること、ゲストが来てくださった場合はトークショーの司会補助を行うこと、上映後に京都開催の観客賞を選出するための投票を呼びかけることです。7 日

間、交代制のシフトで劇場に入り、挨拶や司会をこなしお客様を送り出す業務は忙しくはありましたが、招待作品を鑑賞したり、監督に上映プログラムを褒めていただいたりと非常に充実した時間を過ごすことができました。

トークショーでは、アワード作品の監督や主演の方にお話を伺える貴重な機会だとのことで、もう一度作品を鑑賞し、どんなことを聞いてみたいのかをしっかりと考え本番に臨みました。人に言葉を伝えるのは難しく、話し方や間の取り方などまだまだ課題は残りますが、LumenGalleryでの実習が確かに役に立っていると感ずることができました。

そして実際の動員者数ですが、前年度 273 名に対し今年度 203 名と当初の目標には及びませんでした。チケット制作に手間取り、広報活動の開始が遅れてしまったことや、初期から綿密に連絡を取り合い、効率的に仕事を進めるべきだったというのは今回の実習の反省点です。当初の目標は達成できませんでしたが、実習経験やチーム作業の難しさ、運営する中で経験したこと、悩んだことは各々の成長に繋がる非常に大きな糧になったと思います。

6月から11月まで、長いようであつという間の期間でした。実習を経て監督や映画関係者など多くの方々と話をしたこと、映画祭にどれだけの方が本気で関わっているかを知れたことは、とても貴重な経験だと感じました。今回のインターンシップでの経験や反省点を生かし、私たち一人ひとり、これからの活動に力を尽くしていきたいと思ひます。